

部活動の活性化が学校を変える

チーム熊商の取組み

熊本県立熊本商業高等学校

時 田 剛 二

1 はじめに

現在、部活動を取り巻く環境は、厳しさを増している。指導者の問題や保護者との連携、部員不足等、以前では考えられないような問題も発生している。そのような現状の中であるからこそ、部活動の持つ教育的効果を根本から見つめ直し、その効果をもう一度確認し、多角的に発信したいと思い、今回の取り組みや研究に至った。本校は、学力や運動部活動の取り組み、加入率の状況がとてつもなく低い状況というわけではない。しかし、ただ運動部活動を行っているという状況や、運動部活動やスポーツが持つ教育的効果が発揮されていない現状が存在している。そこで、運動部活動の持つ魅力や教育的効果を具体的に発信することで、学業や学校生活、学校行事、進路実現などの充実につなげていけるのではと考え、実践を進めた。各部活動単位での活動だけにとどまらず、学校を一つのチームとしてとらえ、互いに協力、連携を図ることで、それぞれが抱える問題点の克服や、各部活動単位ではクリアできない課題の解決ができるのではないかと考えた。

また、育成と強化を両輪としてとらえることが大切であると考え、そのための取り組みを行った。部活動を通して、スポーツの楽しさや厳しさ、奥深さを知ることにより、部活動の活性化を図りながら、競技力の向上にもつなげる必要があると考えた。競技力が向上することで、競技へ取り組む意識の変化や、楽しみ方の変化を生徒自身が体感することで、さらに部活動が活性化し、学校全体の雰囲気や活気に大きな影響を与えると考え、この研究、取り組みを行った。

2 研究、取り組みへの経緯

熊本県立熊本商業高等学校は、熊本市の中心部に位置し、全校生徒1,107名、4学科（商業科、会計科、国際経済科、情報処理科）からなる専門高校である。各学年9クラス計27クラスあり、男女比は4:6の割合で女子生徒が多い。熊本県における商業教育の拠点校である。

学校は、大きく乱れがあるということはない。しかし、遅刻者数が非常に多いことや、規範意識の低さによる生徒指導上の問題、学校生活における緊張感の欠落、無気力な生徒の増大など、学校全体として対策を講じなければならない状況が存在した。そして、抱えている問題や課題に関係する生徒の大半は運動部活動を行っている生徒であるという実態があった。本校には、14の運動部活動があり、その中で女子ソフトボール部や女子バスケットボール部、女子陸上部は、常に県内上位の成績を収めている。しかし、大半の運動部活動では、活動は行っているものの、充実が図れず、部活動のもつ意義や教育的効果についても理解できない状況にあった。

そこで、運動部活動をより活性化する取り組みを行うことで、運動を行う意義やその中で得る力や教育的効果を理解させ、よりよい学校生活につなげていきたいという思いからスタートした。

(1) 遅刻、早退者数（学校全体）

	平成25年	平成26年	平成27年
遅刻数（のべ）	1202	1122	760
早退数（のべ）	846	773	464

遅刻、早退者数（運動部活動生）

	平成25年	平成26年	平成27年
遅刻数（のべ）	766	673	289
早退数（のべ）	381	329	146

(2) カード指導件数 *本校の服装や頭髪、生活指導での違反生徒に対する指導。

	平成25年	平成26年	平成27年
学校全体	588件	465件	288件
運動部活動生の割合	68%	56%	38%

(3) 運動部活動加入率

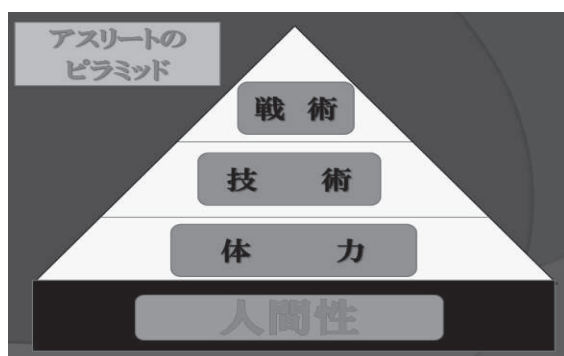
	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
運動部活動加入率	45.2%	44.2%	44.1%	47.4%

3 活性化に向けた取組み

(1) リーダー研修の実施

各運動部活動のキャプテン、副キャプテンを集めリーダー研修会を実施した。この研修を通してまず、具体的な現状を把握し、課題を抽出し、次にあげる取組を行い課題の解決に向けてスタートした。

①部活動の意義と目的についての講義 『アスリートのピラミッド』(年5回)



①体力	跳躍力・瞬発力・巧緻性・筋持久力
②技術	アタック・レシーブ・サーブ・予測・判断力
③戦術	フォーメーション・サインプレー(ABCD)
④野球	
①体力	瞬発力・走力・投力・筋力・筋持久力(投手)
②技術	捕球・送球・バットコントロール・フットワーク・予測・判断力
③戦術	サインプレー・継投・打順(バッターの配置)・シフト
④卓球	
①体力	瞬発力・筋力・筋持久力
②技術	ラケットコントロール・サーブ・スマッシュ・カット・推理・判断力
③戦術	相手の戦型の研究・相手のラバー・グリップ・得意技の研究
④水泳	
①体力	筋力・筋持久力・心肺機能・調整力
②技術	スタート・ストローク・キック・ボディポジション・ターン・ブレス
③戦術	駆け引き・レース運び

②各部活動における問題点の共有及び解決に向けた協力

それぞれの部活動が抱える問題点について協議し、意見交換や助言を行う。特に、女子バスケットボールや女子ソフトボール部は、競技力も組織力も他の模範となる部であり、高い意識を持って部活動に取り組んでいる。そのような部活動から具体的なサポートや助言があり、活発な協議が進められた。その中で、それぞれの部において規定等を作成し、年度初めの作成と学期に1回の見直しと反省を義務付けた。

(課題)

- ・校則違反が多い
 - ・報告、連絡、相談の不徹底(無断欠席など)
 - ・遊びの延長になっている現状
 - ・専門的な指導を受けることができない
 - ・道具や活動環境が整備されていない
- (課題解決に向けたロードマップ作成)

- ・部のルールを作成
- ・部の目標の作成
- ・部の役割分担表の作成
- ・道具管理チェックシートの作成

(2) 競技力の向上に向けた協力体制の整備

専門の指導者がいない部活動や専門的なトレーニングを学びたいと考える部活動に対し、合同トレーニングや指導者を派遣してのトレーニングの実施。

- ①陸上競技の専門教員による、ランニング・ラダートレーニング指導。
- ②フィジカルトレーナーを招聘し、定期的に合同トレーニング及び個別トレーニングの実施。
- ③グラウンド・体育館・トレーニングルーム使用の調整会議の実施。
- ④トレーニング器具や道具の共同利用のための取り決めの作成。

(3) 運動部活動生の学校生活での取り組み

①朝の登校挨拶運動・地域及び校内の清掃活動の実施。

生徒会と協力し、合同で挨拶運動を実施。また、学校周辺や校内の清掃活動を、曜日を指定し、各部活動で取り組んでいる。



②毎朝、始業前にグラウンドで校歌斉唱を行う

吹奏楽部と協力し、毎朝、8時15分からグラウンドで吹奏楽部の演奏で校歌斉唱を行っている。校舎に面してグラウンドがあるため、多くの一般の生徒もベランダに出て一緒に歌ったり、拍手を送ったりしている。

③学校行事の充実に向けた貢献

準備や後片付けなど、運動部活動生が中心となって、生徒会と協力し、具体的に役割分担作成し、一般の生徒と一緒にやっている。決して、運動部活動生だけで行うような状況ではなく、各運動部で役割を持ち、その役割を中心的に担い、一般の生徒にも積極的に声を掛けながら活動している。

④校門一礼運動の推進

本校では、10年以上前から、登校時や下校時において、校門で立ち止まり、一礼するという取り組みを行ってきた。しかし、取り組みを始めたものの、現状は実行できていない状況が続いていた。その中で、まず、運動部活動生が積極的に校門一礼を推進し、取り組んだ。少しずつではあるが、一般の生徒達にも浸透し、まだ徹底はできていないものの、着実に定着しつつある。学校全体としても本校のシンボリック活動として捉えており、より一層の努力と取組を行っていこうと考えている。

決して、運動部活動生だけでの取り組みではなく、学校で大切にしている取組みの充実に向けて、まず運動部活動生が起爆剤となり、周囲に刺激を与えていきたいという考えから、スタートした。

*校門一礼実態調査（校門一礼実施率）

	平成26年	平成27年	平成28年
朝の登校時	38%	76%	90%
下校時	22%	48%	78%

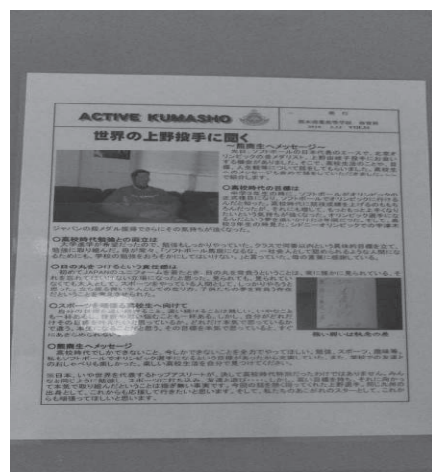
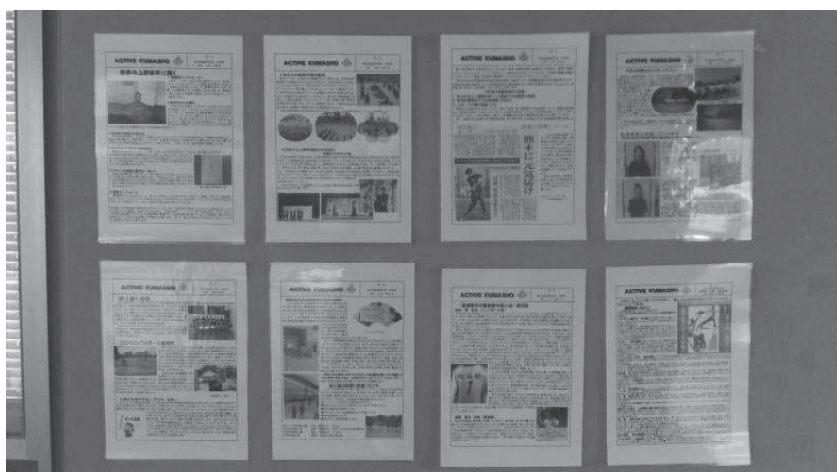


(4) 運動部活動広報誌の発行 (ACTIVE KUMASHO)

運動部活動の活動状況や、活躍、取組み等が発信されることがなく、実態を知らないことがほとんどであった。また、それぞれの運動部活動でも、自分たちの活動以外には関心が薄く、学校という一つのチーム、組織であるという感覚が全くなかった。

そこで、各運動部活動の活躍や活動状況、試合日程、様々なトップアスリートの活躍やコメント、教職員の学生時代の運動部活動の経験等について、月に一回、運動部活動広報誌 (ACTIVE KUMASHO) を発行し、全校生徒及び職員に配布している。このような情報発信を行うことで、興味関心が生まれ、試合日程などを掲載していることで、一般の生徒や他の運動部活動の生徒が様々な試合等に応援にかけつける姿が見られるようになった。

また、競技力向上に向けてのトレーニングの紹介や、体づくりに向けた食育指導などを取り上げている。これまで発行したものを体育館に掲示し、質問ボックスや感想ボックスを設置している。



(5) サッカー部での取組み

例年、90名～120名の部員で活動している。過去には全国大会へ出場した経験を持つサッカー部であるが、近年はその面影はなく、様々な問題を抱える状況にあった。本校の男子生徒の約2割を占めるサッカー部の状況の改善、意識改革ができれば、学校全体にも大きな影響をもたらすのではないかと考えた。そこで、顧問として関わらせていただくようになって、改革に着手した。

①課題の抽出

- ・ 服装や頭髮の乱れ
- ・ 規範意識の低さ (問題行動)
- ・ 無気力
- ・ 活動の質の低さ (トレーニング等)
- ・ 環境整備の不徹底 (部室やグラウンド、道具の管理)
- ・ 学校全体からの不信感の増大

このような状況の中で、まず、今回の活性化に向けた取組みをサッカー部で先行して行ってみようと考え、取組んだ。



(6) 競技力、チーム力の向上を目指す集団へのステップ

生徒達が自らやりたいと思って始めたサッカーをもっと楽しみ、好きになっていくためには、好きなサッカーの個人レベルを上げていくことが大切であると考えた。レベルアップしていくためには、我慢すること、ルールを守ること、どう在りたいという思いを持つこと、正しい努力を継続することが大切であることを伝え、生徒中心にサッカー部のロードマップを作成した。



4 取組後の変化、成果

(1) 遅刻数やカード指導を受ける生徒数の変化

遅刻、早退者数（運動部活動生）

	平成26年	平成27年	平成28年
遅刻数（のべ）	673	289	77
早退数（のべ）	329	146	58

(2) カード指導件数 *本校の服装や頭髪、生活指導での違反生徒に対する指導。

	平成26年	平成27年	平成28年
学校全体	465件	288件	134件
運動部活動生の割合	56%	38%	16%

今後も継続して取り組んでいかなければならない現状であるが、確実に変化を感じることができている。運動部活動生の変化により、一般の生徒にも波及しつつある。

しかし、改善、努力しなければならない点も多く、さらに前向きに現状と向き合っていかなければならないと考えている。日頃のトレーニングと同様、取組みにも変化を加えていかなければならない。

(3) 熊本地震での対応

平成28年4月、2度の震度7の地震により、多くの方が被災した。震源地である益城町は、本校から約5kmの場所にあり、約100名の生徒が在籍している。本校校舎は、5年前に建て替えられており、大きな被害はなかった。しかし、休校を余儀なくされ、約1ヶ月間休校となった。

災害時、小中学校は、指定避難所として、避難してきた方々が体育館や校舎で避難生活を送っていた。本校は、避難所に指定されていなかったが、地域の方々は、学校ということで、約600名の方が本校に避難されてきた。もちろん、受け入れを行うものの、避難所としての準備は全くなく、学校近隣の職員で対応した。その際、緊急の避難所において、大活躍したのが、本校に避難してきた運動部活動生だった。避難所に指定されていないことで、支援物資は約1週間届かなかった。水の確保、高齢者へのケア、トイレや施設の衛生管理、支援物資の調達など、役割分担を行い、精力的に活動した。そして、家や地域が落ち着いてきた多くの運動部活動生がボランティアとしてかけつけてくれた。

その中で、これまでの取組みの成果が現れたと感じる事象が、安否確認である。各運動部活動生は、リーダーを中心に、安否確認と被害状況の確認を迅速に行い、学校に報告した。全校生徒、職員の安否確認や被害状況の確認が始まる前であった。

(4) 競技力の向上

上記に示したような取組みを継続して行ってきたことで、少しずつではあるが、競技力の向上や目標の達成に近づけていると感じている。特に、男子の運動部活動においては、多くの課題を持つ中での取組みのスタートであったが、着実に前進している。

平成28年度 熊本県高等学校総合体育大会 サッカー競技 第2位
全九州サッカー競技大会出場（20年ぶりの出場）

決して、成功ばかりではなく、満足できるような成果ではないが、意識の向上や取組みの工夫、変化が自分の大好きで始めた競技のレベルアップに少しでも繋ぐことができたことは、生徒達の自信につながっている。今後も継続して、工夫して取組んでいきたい。



5 まとめ

今回のこの取組みの中で、強く感じたことは、自主性や主体性をを育むためには、一定の方法論や考え方を教師側が示すことの必要性である。学校や生徒の実態に応じ、トップダウンとボトムアップを併用していくことが重要であると考えた。そして、運動部活動を通じて、生徒たちの自己有用感を高めることが必要であることを感じ、人に認められる、必要とされる感情を持たせることができる活動や、働きかけが、生徒を大きく変化させる。運動・スポーツとの豊かな関わり方を伝え、また、生徒が自ら発見し体感することで、生徒達の今後の生き方や在り方に大きな影響をもたらすはずである。

今後も、運動部活動の活性化に継続して取組み、学校全体に対し、運動部活動の持つよりよいパワーを発信していきたい。そして、新たな取組みも模索し、さらに変化、進化を遂げたいと考えている。